

新刊紹介

著者	里見 信生, 植田 邦彦, 木下 栄一郎
著者別表示	Satomi, Nobuo, Ueda, Kunihiko, Kinoshita, Eiichiro
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	42
号	2
ページ	7p.
発行年	1995-02-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055636



○細井幸兵衛 青森県野生植物目録 B5判, 84頁, 1994年12月15日, みどり造園有限会社植生調査部(〒038 青森市大字新城字平岡 252-90), 非売品。

本書は“青森県野生植物誌”を発行するための前段階としてつくられた, 青森県下の野生植物の目録である。登載された数は167科, 763属, 2019種, 21亜種, 158変種, 287品種であるという。この中においても, タチガヤツリ, コガネギシギシ, ヒシモドキ, ヒンジモ, トウゴクヘラオモダカ等は現時, 全く存在が不明で絶滅したのではないかと憂慮されている。

青森県の植物目録は村井三郎が, 昭和14年(1939)に, 双子葉植物編, 昭和16年(1941)に, 単子葉植物・繖果植物・羊歯植物編を発行して以来のことで, すでに半世紀が過ぎているので, 本書は大変参考になることは言うまでもない。(里見信生)

○井波一雄: 鳥居喜一さんを偲ぶ Kazuo Inami: Obituary of the late Mr. Kiichi Torii

鳥居喜一さんと申しても全国植物研究同好の士にはなじみのないお名前かと思えます。それほど生前の氏は名を売ること無頓着というよりは, 名を出すことを毛嫌いされたようであり一冊の植物書も公にされなかったのは今となってはいささか残念です。筆者のごときも同じ愛知県植物調査に同好同学の民間人として半世紀の余を私なく悠なく共に手をとって山々を歩き採集に遊び楽しんで過ごして来ました。

晩年会うたびにお互いに挨拶代わりに出た言葉は「よいときに歩けたネ。ドウラン肩に大手を振って探検のように全く空白の天地を楽しめたものネ。今やレッドデータの危惧植物などとレッテル貼られた哀れな草木がどこにも自由に何の制約もなく採れたネ。」と老人らしい追憶のみがくりかえされる今日ではあります。すべての山野が奥の奥までゴルフ場と化し, 谷間はどこもダムに沈み, 延々とした車用の観光山岳道路が走って, 裾野の路側にはガードレールと吹き付けのコンクリートに包みこまれ, 国有林の自然林は皆伐され, かつて便乗した林鉄は自動車道となるか林木も無くなれば, 週末よく利用させてもらった林業宿舍もなくなり, 行商のクスリ屋さんと同宿した村の宿も消えて, 峠越えの峠道すら亡び去り山原草地も共に亡びて, 遊園地化して観光荒廃の一途で, もう歩く力も無くなったネと愚痴るばかりでした。

鳥居さんが新種新変種として専門学者によって公表されたものは6種もあって, ミカワコバイケイとかグンドシダなどがよく名を知られていますが, また県下で初めて分布が記録されたものは60余種といわれています。鳥居さんご自身のテリトリイを終生守って, 決して己の守備範囲をはみ出で外まで足を手をのばされなかったのは偉い見識で, 住居地新城市を中心とした愛知県東辺の静岡県境までの南北が縄張りであられました。どんなに珍しいとか美しいとか話題になる有名なものが知られても, この設定された「東三河」という一地方に限られてその行政地域以外には1ミリも外に出られなかったことは常人コレクターにはできない自制かと思えます。地域や全国で学会集会有るがただの一回もそうした会合には出席されませんでした。それでいて, 万巻の植物書や専門雑誌, 研究学会誌はすべて揃えて, 関係のある民族学のドルメンなども全部揃えておられました。柳田全集も熊楠全集も寅彦全集も造りつけのガッチリした書棚に並んでいました。その御居室は広い畳敷でいつも火鉢に古い鉄瓶が湯気を立てていました。

毎年戦前には正月の日曜日当てる, 東三河の当時の在野同好の士であった鳥居氏ご本人, 豊橋の故恒川敏雄さんと鳳来町(当時は三輪村とあった)の山本隆さんと筆者の四名が朝からこのお室で丸一日中植物談義に時を忘れた三河版オランダ正月三昧を過ごして終電車にかけつける陶醉であったのは追懐の最であります。戦後はこの無名の会に名大にご赴任の高木典雄教授を加えても何の利も求めない遊びとノルマのないつどいつぎの一年を待ったものでした。

筆者井波は鳥居さんといちばん長いご交誼を辱くした仲ですが, 逝かれるまでついに筆者は鳥居さんのお年を伺うこともなく訃報で82才と承知する植物の友でしたから, ご家族のこと, ご子息のことなど一回も話題に上がったこともなく, 遊びの同宿でも花のこと草のこと以外お互いに酒もタバコも口にしない仲として宿でもオシバはさみに余念がありませんでした。

愛知県の東部の東三河の植物地理学的調査研究に全生涯を尽くし捧げて急逝の直前まで歩きに歩かれた鳥居さんを一番身近に知る一人として, 鳥居さんの影を慕って歩く道の消えた今日はさみしさ一倍の心境であります。鳥居さん有難うと合掌。名を求めず一途に植物が好きで生涯を貫く士はもう生まれなんでしょう。

(〒464 名古屋市千種区豊年町 15-20 15-20 Hounen-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464, Japan)

合、側脈の伸長のみで対応するのではなく、主脈方向もさらに伸長している可能性が示唆される。

以上のことから、葉の縦横比は西日本、東日本太平洋側、東日本日本海側で異なっていることがわかる。すなわち、東日本太平洋側ではその他の地域と比べて相対的に横長の葉形である。ツクバネソウやヤマボウシでは、北方個体や日本海側個体の方が太平洋側の個体に比べ葉や総苞片が幅広く全体的に丸くなる傾向にあることが知られている。しかし、フサザクラは必ずしも北方や日本海側で広葉型、南方や太平洋側で狭葉型になるとはいえず、東日本においては、太平洋側地域が広葉型、日本海側で狭葉型であった。

おわりに

以上のように、東日本におけるフサザクラの葉面積および葉形に関して、太平洋側のものと日本海側のものとで地理的な変異が認められた。前報では、福島県の葉面積が神奈川県や静岡県と比べてむしろ減少したことから、フサザクラにおいては太平洋側の関東付近で葉面積が最大になるのではないかと示唆した。しかし、本報の結果から、フサザクラについても他の植物で報告されているのと同様に、太平洋側のものよりも日本海側のものの方が葉面積が大きいたことが明らかとなった。

これらの地理的な変異の要因として、気温や降水量、環境傾度指数(萩原 1977)など現在の気候条件の影響が考えられる。しかし、調査地点付近の気象観測データをもとに検討したところ、今回は両者の間にはあまり明瞭な相関はみとめられなかった。展葉期の水分との相関に関しても、ブナにおいて黒松内地帯では展葉期に乾燥するにも関わらず、葉面積が大きいとの報告(日浦 1993)があり、そこではブナにおいての葉形質の表現形は、環境よりも遺伝的に規定されていると結論されている。いっぽう、距離的にかなり離れた地域が同じ変異のまとまりに属することは、フサザクラの変異の地理的まとまりを、現在の環境要因のみで十分に説明できないことを示唆している。一つの要因として、過去の気候変動に伴った地史的要因による影響の可能性が挙げられる。フサザクラの葉形質がなによって規定されているかを考察することは、今後の課題である。

また、前報では福島の葉の形質は東日本太平洋側のなかではやや異なっていた。今回は、葉を採取した年が異なるので直接比較をしなかったが、福島の葉の形質が、岐阜・群馬・栃木のものより類似するのか、あるいは神奈川県・千葉のものにより近いのかを明らかにすることが必要である。今後は、太平洋側の分布北限付近での葉面積の減少や、太平洋側と日本海側の間地域での葉面積の減少、さらにはブナで指摘されているような、葉面積と葉の厚さとの関係(小池ら 1990)などを明らかにすることによって、葉面積、葉形の地理的な変異をより詳細に検討できよう。

引用文献

- 萩原信介. 1977. ブナに見られる葉面積のクラインについて. 種生物学研究 1: 39-51.
- 日浦勉. 1993. 日本列島におけるブナの形質と林分構造の地理変異. 108 pp. 北海道大学審査博士論文.
- Horikawa, Y. 1972. Atlas of the Japanese Flora. 500 pp. Gakken, Tokyo.
- 池上宙志・沖津進. 1993. フサザクラ (*Euptelea polyandra* Sieb. et Zucc.) における葉面積と葉形の地理変異. 植物地理・分類研究 41: 77-84.
- 堀田満. 1974. 植物の進化生物学 III. 植物の分布と分化. 400 pp. 三省堂, 東京.
- Kawano, S., Ihara, M. and Suzuki, M. 1968. Biosystematic studies on *Maianthemum* (Liliaceae-Polygonatae) IV. Variation in gross morphology of *M. kamtschaticum*. Bot. Mag. Tokyo 81: 473-490.
- 河野昭一・長井幸雄・鈴木昌友. 1980. 日本列島におけるツクバネソウの地理的クラインについて. 植物地理・分類研究 27: 74-91.
- 小池孝良・田淵隆一・藤村好子・高橋邦秀・弓場譲・長坂寿俊・河野耕蔵. 1990. 夏期における国産ブナの光合成特性. 日林北支論 38: 20-22.
- 八田洋章・山口秀和. 1987. ヤマボウシ *Cornus kousa* Bueg. の変異と生態IV. 地理的な変異の研究. 植物研究雑誌 62: 244-256.
- (received May 20, 1994; accepted November 11, 1994)

○ため池の自然談話会(〒458 名古屋市緑区鳴海町浦里2-168浜島繁隆気付)編 身近な水辺 ため池の自然学入門 A5判, 165頁. 1994年8月27日, 合同出版株式会社(〒101 東京都千代田区神田神保町1-52). 1600円.

ため池は地域の人びとに身近な水辺として親しまれて来たが、そこにどのような生物が生息し、どのような生活が営まれているか、よく知られていない。

“ため池の自然談話会”はため池の自然科学的な研究を系統だてて行なうことを志して結成された由で、そ

の結成10周年を記念して、それまでの研究成果が、本書の内容となった。

(里見信生)

○栗原智昭*・白井伸和*・渡辺寛**：石川県加賀地方各地で危急種ミズアオイの生育を確認 Tomoaki Kurihara*, Nobukazu Shirai* and Hiroshi Watanabe**: Locality of a Vulnerable Species, *Monochoria korsakowii* (Pontederiaceae), in Ishikawa Prefecture, Japan

青紫色の美しい花をつける水草ミズアオイ *Monochoria korsakowii* Regel et Maack はかつては各地の水田、水路、溜め池などに普通に見られた植物だったようだが、土地開発や除草剤の普及などにより激減し現在ではいわゆる「レッドデータブック(1989)」で危急種の指定を受けるに至っている。

そのミズアオイらしき植物を松任市の海岸近くの側溝内に発見したのは1994年6月のことだった。発育が不十分で確信が持てなかったが、花序の成熟を待ち、9月にミズアオイであることを確認することができた。この生育地は約20mにわたって深さ10cm程の水がたまっており、底には砂が見られる。ミズアオイ約30株と近縁種であるコナギの他、オモダカ、ヘラオモダカ等の水生植物が観察された。ここの水は湧き水がたまったものらしく、この夏の記録的な猛暑と少雨にもかかわらず絶えることがなかった。この「発見」に端を発し、各方面にミズアオイに関する情報の提供を呼びかけたところ、石川県内から10件を超える情報が集まった。現地調査の結果、一部コナギなどの誤認も見られたが、金沢市、根上町、小松市など加賀地方各地でミズアオイの生育を確認することができた。特に金沢市湊と航空自衛隊小松基地付近では用水路に大きな群落が見つかった。生育地の多くは底部に土砂が堆積した灌漑用水路や道路脇の側溝で、生活排水が流れ込み悪臭を放つような場所も含まれている。

「東北地方をのぞいてきわめてまれな水草」(角野, 1994)とまで言われたミズアオイが石川県内各地にまだ生き残っていたという事実は、地元で植物に関わる者として喜ぶべきことだろう。今回観察した生育地の状況や、果実から散布される大量の種子を見る限りでは、ミズアオイは決して繁殖力の弱い植物ではない。にもかかわらず日本各地で激滅しているという現状が何を意味するのか、植物学上の興味を超えてある種の危機感を感じずにはいられない。今後もミズアオイに関する情報収集を継続していく予定である。地域を問わず、ミズアオイの生育地の状況を渡辺寛(「ミズアオイの会」事務局)宛にお知らせいただければ幸いである。

またこれまでの情報収集、現地調査にあたり、角野康郎先生(神戸大学理学部)、「河北潟を考える会」の皆さん、朝日新聞および北陸朝日放送の記者の方々、航空自衛隊小松基地の方々のご協力があったことを付記し、深謝したい。

採集したミズアオイの標本は次の通りで、金沢大学理学部植物標本室(KANA)に納めた。

KANA190706 (Kurihara, Oct./13/94, 小松市航空自衛隊小松基地横 beside Komatsu Air Base of Self-Defence-Force, Komatsu); KANA190705 (Kurihara & Watanabe, Oct./14/94, 航空自衛隊小松基地内 in Komatsu Air Base of SDF, Komatsu); KANA190707 (Kurihara, Oct./13/94, 小松市城南町 Jyonan-machi, Komatsu); KANA190708 (Kurihara, Oct./13/94, 根上町大成町 Taisei-machi, Neagari); KANA191699, 191700 (Kurihara, Sept./01/94, 松任市徳光町 Tokumitsu-machi, Matsutou); KANA 191703 (Watanabe, Sept./16/94, 金沢市北間町 Kitama-machi, Kanazawa); KANA191701, 191702/(Kurihara & Watanabe, Sept./27/94, 金沢市湊 Minato, Kanazawa); KANA 191704 (Kurihara, Oct./17/94, 金沢市南神保町 Minami-jinbo-machi, Kanazawa)

引用文献

角野康郎. 1994. 水辺環境の危機と水草の絶滅. 科学 64: 691-693.

我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会. 1989. 我が国における保護上重要な植物種の現状. 320 pp. 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会, 東京.

(*〒 920-11 金沢市角間町金沢大学理学部植物自然史講座 Laboratory of Plant Natural History, Faculty of Science, Kanazawa University, Kanazawa 920-11, Japan; **〒 920-02 金沢市北間町は7 Ha-7, Kitama-machi, Kanazawa 920-02, Japan)

的集団内で形成された F_1 雑種の異型配偶子と母植物との戻し交雑の結果形成された部分的なヘテロのゲノム構成を持つ4倍体、あるいは2倍体個体である可能性もある。いずれにせよ、大半の雑種性3倍体は不稔で種子形成は正常には行われないので、母

種個体間で繰り返し交雑が行われることによって集団内に引き続き生み出されているものと推定される。

(received August 5, 1994; accepted December 10, 1994)

○井波一雄：西原禮之助さんを想う Kazuo Inami: Obituary of the late Mr. Reinosuke Nishihara

敢えてこの先人を西原さんと呼ぶほどに親しく懐かしい植物の友でありました。

氏が岡山きっての銘酒「お多美鶴」の社長さんであることを存じ上げるず一つと以前から氏のご令名は存じ上げ各種学会が各地で全国集會をもたれた折々には、よくご同席の榮をいただいて自社の製品詰めの小瓶などを全員に用意されたご温情を飲めないながらいつも有難く、ヤアヤアと親しげにご挨拶を交したことなどが思い出されます。

昭和5年から植物に関心を持ち採集に力をいれつづけて県下各地はもとよりひろく全国各地を採集して歩かれたご様子は氏のご労作「岡山の植物」(昭和39年刊。岡山文庫1)によくまとめられて巻頭自序にも「素人の私共(生態写真を倉敷レーヨンの岡山工場の古谷野 寛氏が提供された)がこのように本としてまとめることができたのも、故牧野富太郎博士、故小泉源一博士、前川文夫博士、北村四郎博士等の諸先生のご指導とご激励の賜物と深く感謝致します云々」と述べられた通りであります。

同書にオオバイカイカリソウを掲げられた解説に「本種は阿哲、川上および備後の北部、主として石灰岩露出地帯を中心として極めて狭い範囲に限られている」と地元岡山県での観察を明記され、さらにオオバイカイカリソウとトキワイカリソウとの天然交雑にも触れ、前川文夫博士のスズフレイカリソウ、小泉源一博士のウメザキイカリソウなど諸説に千変万化の微妙な差を観察されて「どれがトキワイカリソウでどれがオオバイカイカリソウであるのかわからなくなってしまう」と頭を抱えられる著者の姿が浮かんできます。ちなみに現在ではこのオオバイカイカリソウはスズフレイカリソウともいわれ、バイカイカリソウとトキワイカリソウの交雑種群とされて、さまざまな中間形態のものも含まれると解説されています。昭和4年に出版の吉野善介の名著「備中植物誌」にはバイクワイカリとイカリサウだけでオオバイクワは名も出ないのは当然でオオバイクワが認識発表されたのは1932年(昭和7年)のことであった。ホソバナコバイモの記事に著者はこの初採集は阿哲郡草間村で赤木敏太郎氏が発見し、大正3年小泉源一博士が「新撰植物図編第二編第一集」に発表のものと解説されるので、前記備中植物誌にみると赤木氏は阿哲郡草間村姫原の人で郡内小学校教員であったことが判り、ほかにチョウジガマズミ、ヤマトレンギョウを発見しておられることが知られます。今珍稀危惧種とされるほどに減少したオグラセンノウも美しい写真で紹介され、岡山県では小坂弘氏が大正9年8月阿哲郡哲西町で採集されたものなどと、この種の発見史にも触れられ、さらに新見市の唐松小学校の記事はこの小坂氏の考案になるヒメコマツが図案化されたものと別頁に記されています。チョウジガマズミについて、村越氏は「集成新植物図鑑」のこの種についての記載が「大木にして云々。葉が対生する様殆ど丁字形をなせるの観あり故に本和名あり」とは全くの誤認であると広く万卷に当たられた姿勢を偲ぶことができます。

さらに昭和56年には岡山文庫100として「岡山の樹木」を著されています。今はひろく庭木に導入されて普及しているオオカナメモチが同県東部に大久保一氏によって発見されたことなども記され、17年前の「岡山の植物」に縁を得て多くの知己を得たことを喜ばれ、殊に岡山の植樹祭には天皇陛下の御散策の御相手を務めた光栄を生涯忘れることはできないと自序されています。

学者の論文は容易に民間同好素人の目には触れないことが多く無縁であることが多いが西原さんのような自ら素人をうたって、たのしく親しみやすい一般啓蒙書を残されたことは遠近にかかわらず著者の知の領布にあずかる学徳の余沢がいついづまでも消えることがないことを痛感して、親しかった同好の友西原さんと今一度一献を傾けることのない人の世のさみしさを痛恨して岡山の人西原礼之助さんを偲びます。

(〒464 名古屋市千種区豊年町15-20 15-20 Hounen-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464, Japan)

○石川県地域植物研究会(編) 石川県樹木分布図集 B5判, VII+489頁+添付フィルム10葉, 1994年3月31日, 石川県林業試験場, 6,000円(送料800円)。

石川県の植物誌については樹種に限っても石川県樹木誌(1977)、石川県樹木誌図譜(1987)がすでに刊行されている。石川県地域植物研究会ではさらに樹種について精確な分布情報を集積することを目標に1985年から10年に渡る努力を重ねられ、ついに本書の出版の運びとなった。上記2誌の情報に加え、さらに現地調査と標本調査を徹底し、分類学的な再検討も行い、自生樹種全種類(変種以上については例外を除きすべての種類)について分布地点を5倍地域メッシュ(2万5千分の1地形図の1/4に相当:1辺約5km)の精度でまとめたものである。挙げられた樹種は447種類に及び、1種類に1ページをあて、水平分布図、垂直分布図の他に分布型やコメントが付されており、各種類毎に担当者が明記されている。分布地点の基本としたおよそ10万点の標本すべてに本書のデータである旨のラベルが貼られているとのことである。膨大なために資料として本書には引用されていないが、パソコンで利用可能な形態で近く提供予定とのことであり、むしろ望ましい処置として歓迎したい。分布図には1945年以前の標本しかなく現存が確認されていない場合は白丸、以降の標本には黒丸が使われ、また信頼性の極めて高い文献情報に基づく場合は白抜き黒丸で記されている。一方、オーバーレイフィルムが10葉用意されており、積雪量など様々なデータを各分布図に重ね、分布と環境要因を考察する便もとられている。石川県の樹種分布と題する詳細な解説が研究会会員であり、本学会会員でもある古池博氏によりまとめられており、優れた簡略植物誌ともなっている。

南北に大変細長い石川県は、南端は東京の少し北方であるのに対して、能登半島の先端は東北地方、福島県の猪苗代湖と同緯度であることは意外に注目されていないのではなかろうか。その能登半島にだけ典型的な常緑樹であるシキミヤカゴノキ、ヤブニッケイが分布しているのに対して、落葉性のアブラチャン、ダンコウバイは加賀地方にしか見られない様など、見ているだけでも楽しく、かつデータが信頼できるので安心することが出来る。往々にして間違った常識が孫引きで流布しがちな分野だけにこの点はたいへん重要である。もっとも一つ気になったのはヘビノボラスが戦前に採集された1点だけではあるが能登半島に記されていることで、典型的な東海丘陵要素であるだけに基づいた標本に疑問が残る。

このような分布調査は学界では近年とかく軽視されがちであるが、こうして完成されたものを拝見するとそのような風潮がいかにおごりに満ちたものかを思い知らされる。分布図を丹念に見ていけば多くの発見がある。そしてこのような情報を纏めるには膨大な時間と労力が必要である。草本に関しても同様の調査を開始されているので、完成が待ち望まれる。

本書では単に石川県に限った植物誌としてだけではなく、今後の分布調査研究に一石を投じた意欲的先進的な試みがなされている。全国の分類学徒に広くお薦めしたい労作である。本書の購入については〒921 石川県石川郡野々市町住吉町3-10 本多郁夫宛に問い合わせられたい。(植田邦彦)

○里見信生 続折々草 B5判, x+112頁, 1994年12月15日, 自家出版(〒921 金沢市久安4-359), 2500円。

著者は停年退官の折りに、「折々草」と題した本を刊行されたが、これはその続編である。退官後に様々なところに書かれた、植物、巨樹、本誌の表紙を飾ることが多い収集した帽章にまつわるお話などが集められており、著者の博識にあらためて驚くところである。購入ご希望の方は著者に連絡されたい。(植田邦彦)

○益村 聖 絵合わせ九州の花図鑑 A5判, 588頁, 1995年1月20日, 海鳥社(〒810 福岡市中央区大手門3-11-27), 6500円。

全国版の図鑑では関東や関西の植物を中心に編集されるので、地方地域の植物となると省かれていることが多々ある。本書は九州(中・北部)産の種子植物の大部分の種類に触れ、その数は図示したものが1500種におよび、著者は発刊の目的として植物を専門としない人を対象としていることから、葉の形などから1~12群を分け、その後は簡単な絵合わせにより、初心者でも、その名前を引出すことが出来るように工夫した。また、それに加えて季語と俳句・短歌の作例を収録し、歳時記として使えるように考慮したことは本書の特徴と言える。(里見信生)

○アレン・コーンビス(日本語版監修 浜谷稔夫) 木の写真図鑑 A5判, 328頁, 1994年12月30日, 日本ヴォーグ社(〒162-91 東京都新宿区市谷本村町3-23), 2900円。

著者のアレン・コーンビスはイングランド・ハンプシャー州にあるヒリアー植物園に勤務される方で、専門は木本植物の分類であるが、「園芸家の植物エンサイクロペディア・ヨーロッパ園芸植物誌」などの園芸書の執筆・刊行にも携って来ている。

本書の内容は世界の高木を1000枚をこえるカラー写真で500種余を解説している。したがって、わが国のカラマツと外国産のヨーロッパカラマツ・ダンケルドカラマツ・アメリカカラマツ・セイブカラマツが比較しながら見ることが出来る。(里見信生)

- 白崎仁. 1992 b. コケ植物の生態分布 4. ミドリイヌ
エボウシゴケとコクサゴケ (蘚類). 植物地理・分
類研究 40: 133-143.
- 白崎仁. 1993. コケ植物の分布型と雪国の気候 (講
演要旨). 日本蘚苔類学会会報 6: 43.
- 白崎仁. 1994. コケ植物分布資料 1. スナゴケ類. 「む
かご 9」 (関省吾編), pp. 33-41. 植物同好じねん

- じよ会, 新潟.
- 渡辺茂・白崎仁. 1991. 精密なメッシュを用いて分
布図を作成する新方法とコケ植物の分布の解析.
植物地理・分類研究 39: 131-135.
- (received November 24, 1993; accepted Septem-
ber 27, 1994)

○岩瀬 徹: 浅野貞夫先生を悼む Toru Iwase: Obituary of the late Mr. Sadao Asano

「北陸の植物」以来の本会会員であった浅野貞夫先生は、1994 年 1 月 28 日 87 歳の生涯を終えられました。先生は 1906 年山形市に生まれ、1930 年千葉県鴨川市にある県立長狭中学校 (後に長狭高校) に赴任され、以来 1965 年まで一貫して同校で生物教育に当たられました。その後市立市川高校を経て、1970 年に千葉市泉自然公園管理事務所の嘱託となり、各地の緑の保全や教育普及に尽くされました。先生が安房の地に腰を落ち着かれたのは、清澄山を中心とする房総丘陵が植物分布上大きなラインになっていると感じ、ここの植物相の解明に取り組もうとされたためといわれます。「房総のフロラ垂涎記 (千葉県生物学会会報 No. 1, 1949)」という一文がありますが、まさにフロラ賛歌といえます。かつての代表的分類学者の牧野富太郎、小泉源一、田代善太郎、中井猛之進など諸先生に親しく教えを受け、特に竹笹の研究にうちこみ多くの新記載を発表されました。戦前は千葉県植物採集会、戦後は千葉県生物学会の指導的な役割を果たされ、千葉県植物誌 (1958, 1975) の植物目録の作成に当たられました。高等植物だけでなくコケや海藻、さらには動物までと文字通り博物学に精通されていました。先生の植物図は格別で、精確な観察に基づくスケッチ、スケッチを通してまた観察をと繰り返して、それが美しい図に仕上がります。この図が分類学的な表現に加えて生活型的な表現へと発展したのが、沼田眞博士との共同の業績です。生活を図に表現するには 1 種ごとに多くの年数を要します。その成果の一部は共著の論文となったほか、「日本植物生態図鑑」「原色日本雑草図鑑」などとして刊行されましたが、まだ多くの図が未刊のままとなっています。また泉自然公園に移ってからは、種子と芽生えの形態に興味をもたれ、数百種の芽生えを育てて記録に残されました。このお仕事は、病に侵されおそらく寿命の尽きるのを悟られたであろう最期のときまで続けました (この残された成果は近く全国農村教育協会から刊行されることになっています)。先生はまたきびしさや温情をもった教育者でありました。生物部の指導に情熱を傾け、県下随一の業績をあげ、その薫陶を受けて専門の道に進んだ多くの人材があります。教職を離れてからは、豊富な知識とユーモアのある語り口で野外指導に当たられ、大いに裾野を広げられました。まだまだ教えを請うことは多くあったのですが、それもかなわぬこととなりました。ご冥福を祈るばかりです。

(〒 276 八千代市八千代台北 12-14-22 12-14-22 Yachiyodai-kita, Yachiyo 276, Japan)

○初島住彦・天野鉄夫 増補訂正 琉球植物目録 A 4 判, 393 頁. 1994 年 11 月 1 日, 沖縄生物学会 (琉球大学理学部生物学教室内). 非売品.

本書は 1977 年に出版された琉球植物目録の増補改訂版である。奄美大島以南の琉球列島に自生または帰化した植物はもちろんのこと、栽培されているシダ植物以上の植物を網羅したものである。前回の目録と違い、本目録では学名が完全になり、使い勝手がよくなった。日本の植物を考えると、本土およびその周辺は言うにおよばず、琉球列島や小笠原諸島の植物も考慮に入れる必要がある。近年交通手段の発達とともに、以前はほとんど調査されない地域の調査が行われるようになった。その結果多くの種の記載や新産地の報告が行われたが、そのすべてについて情報を得るのはなかなか難しい。前回の出版からすでに十数年たっており、この地域の研究の進展を考えるとたいへん適宜な改訂である。

(木下栄一郎)

and Jaeger (1985) により、これらのタイプ標本は *S. indicum* とされ、上記の学名が新たにつけられた。
ヒメヤムグラ *Galium divaricatum* Pourr. ex Lam.

1992年6月、川崎市麻生区の宅地造成地で、皆川和子氏によって採集され、勝山(1992b)により報告された(標本:川崎市麻生区上麻生4丁目1992年6月16日 皆川和子 FLK 104765;川崎市麻生区上麻生4丁目1992年7月19日 吉川アサ子 FLK 104781, 104782;川崎市麻生区上麻生4丁目1993年7月6日 吉川アサ子 FLK 105284)。

南ヨーロッパ原産。ヤムグラに比べ全体に繊細である。ヤムグラでは、茎にも葉の縁にも逆刺があるが、本種では、茎には逆刺があり、葉の縁には上向きの刺毛がある。花柄が細くて比較的長い。果実は直径0.5mmと小さく、表面は平滑である。ヨーロッパには近縁なものに *G. parisiense* があるが、これは果実の直径が1mmほどあり、表面に逆刺があるので異なる。

引用文献

- Hepper F.N. and Jaeger P.-M.L. 1985. Name changes for two old world *Solanum* species. Kew Bull., 41(2): 433-435.
- 神奈川県植物誌調査会(編). 1988 a. 神奈川県植物誌 1988. 1442 pp. 神奈川県立博物館, 横浜.
- 神奈川県植物誌調査会(編). 1988 b. 神奈川県植物誌 1988 補遺. 11 pp. 神奈川県立博物館, 横浜.
- 勝山輝男. 1989. 植物誌発刊後に記録された植物(1). Flora Kanagawa (27): 236-242.
- 勝山輝男. 1990. 植物誌発刊後に記録された植物(4). Flora Kanagawa (29): 294-295.
- 勝山輝男. 1992 a. キダチハリナスビについて. Flora Kanagawa (32): 353.
- 勝山輝男. 1992 b. 帰化植物がゾロゾロ. Flora Kanagawa (34): 368-372.
- 北川淑子. 1990. 横浜市緑区で見つけた *Scirpus* 2種について. Flora Kanagawa (29): 290-293.
- 北川淑子. 1991. 横浜市緑区で発見したクロアブラガヤ類2種について. すげの会会報 2: 3-9.
- 太田久次. 1985. 三重県帰化植物誌. 149 pp. ムツミ企画, 津.
- 小崎昭則. 1991. 神奈川県産の植物補遺(1). Flora Kanagawa (30): 305-319.
- (〒250 神奈川県小田原市入生田499 神奈川県立生命の星・地球博物館 Kanagawa Prefectural Museum of Natural History, Iriuda 499, Odawara 250, Japan)

○リズ・マニカ(八坂書房編集部訳)ファラオの秘薬—古代エジプト植物誌 B5判. 314頁, 八坂書房, 2,884円。

今日のエジプトの植物利用は古代エジプトに発した伝統的な利用をそのまま継承し、各地の市場では調味料や薬用として様々な植物が売られているという。中世に最高潮に達したイスラム科学は、医薬品としてどのように植物を利用するかについて当時の世界で最高水準を誇った。しかし、イスラムの科学者はその知識を主に古代ギリシャの書物と、初期キリスト教徒として知られるコプト人の書物から得たという。コプト人の祖先は古代エジプト人であり、ファラオの時代から植物に利用についての知識はは連綿と現代まで引き継がれている。この本は古代エジプト人がいかに植物を利用したかに関して述べられ、大きく2部構成となっている。最初はエジプトの庭、装飾品、化粧品、香料、医薬品のように利用形態ごとに、述べられている。例えば、ミイラを作るときに使われた様々な植物、死者の埋葬の時に添えられた植物等が詳しく述べられると同時に、線画や写真もふんだんに使われ、古代エジプト社会を垣間みることができる。後半は古代エジプト植物誌と題され、個々の植物についての利用の記述である。ここでいちばん驚くのは、植物名の学名や利用方法の説明はもちろんのこと、古代エジプトの聖刻文字、コプト語、ギリシア語、現代アラビア語の名前まで付けられていることである。そのため、植物学、農学、薬学、医学の方面からエジプトの植物利用に興味を持つ人ばかりではなく、この地域の歴史学、考古学、民俗学などにも興味を持つ人達にとってもこの本は大変に有用であると思われる。また聖刻文字(ヒエログリフ)に興味を持つ人達にとっても楽しい入門書になるのではないか。さらに、用語解説、原著参考文献一覧などがあり、単なる読み物というよりはエジプト有用植物小辞典といった趣である。ただ、日本語訳がいかに翻訳調の所が散見された。この本の性格を考えればそれでもよいのかもしれないが、少し残念であった。(木下栄一郎)